

海外の武道人が創り出す武道の特殊性：オーストラリア、シドニーのライカート道場の場合

岩切, 朋彦
西南学院大学大学院文学研究科

<https://doi.org/10.15017/2338943>

出版情報：九州人類学会報. 29, pp.94-111, 2002-07-06. Kyushu Anthropological Association
バージョン：
権利関係：

【研究ノート】

海外の武道人が創り出す武道の特殊性
—オーストラリア、シドニーのライカート道場の場合—

岩 切 朋 彦

(西南学院大学大学院文学研究科)

はじめに

日本武道は、数ある日本文化のなかでも、もっとも世界に広まったもののひとつである。しかし、「国際化」の過程とともに、日本の武道人の間では、「武道とは何か」ということに関する議論が盛んになされるようになり、多くの「武道論」が世にあらわれた。数多くある運動文化のなかでも、「武道論」のように、他の運動文化に対してはつきりと境界を設けようとする言説が起こるのは、おそらく日本武道以外には存在しない。他の運動文化は、「スポーツ」という「普遍的志向」へと向かっていくのであり、その志向を経ることによってはじめて、世界中へ越境させることができるからである。

武道論の多くは、「武道はスポーツではなく、それ以上に奥深くてユニークな文化である」とするようになり、武道の独自性や特殊性を、日本文化を背景にして主張するものである。その背景には、現在、主に競技志向に向いていく武道が、その独自性や特殊性を失ってきており、「武道」というカテゴリー自体にアイデンティティーが存在しなくなってきたことへの危惧があると思われる。「武道」と呼べるものはいったいどのような文化なのか。これが武道論の最大課題となっている。

武道論とは、武道の独自性や特殊性を、西洋文化、具体的にはスポーツと比較して説くものなのだが、そういった武道が西洋文化圏においてはどのように受容されているかという問題は非常に興味深い研究となる。この研究のひとつとして、筆者が実際にオーストラリアのシドニーにある、ライカートの合気道道場で行ったフィールドワークをもとに、特に合気道に限定して、海外の人々の武道に対する主体的な関わりについて論じていきたいと思う。

なお、本論では、シドニーのライカート道場に通う人々の動きや考え方を、人間として生き生きと描き出すため、筆者が体験したことや感じたことをそのまま描き出す、主観的、一人称民族誌的な描き方で人々の様子や考え方を映し出し、それにしがたって分析的叙述を行う、二段論法によって論を進めることにする。

1. 調査方法および覚書

2001年8月6日から9月5日までの約1ヶ月間（以下「前期調査」と）、11月21日から12月4日までの約2週間（以下「後期調査」）、私はオーストラリアのシドニーに滞在し、地元の合気道の道場で稽古に参加しながら観察を行った。道場の選択は、インターネットによって情報を調べ、「財団法人合気会」¹から派遣された師範によって興された、同じ合気会系の道場を選択した。稽古は毎日行なわれるので、そのほとんどに参加した。後期には補助的にチェック項目式のアンケート調査を行い、50人のサーバントから回答を得ることができた。ただし、このアンケートはあくまでも補助的なものであり、実際の調査成果は、稽古に参加することによって得たものである。フィールドワーク時に観察した武道の種目、稽古への参加および調査は、合気道のみにとどめた。理由は、

- ① 私が長年合気道をしてきて有段者であり、合気道に関しては一定の知識と経験をもっていること。
- ② 有段者といっても初段止まりであり、初心者でもなく、かといって高段者でもない日本人、という微妙なレベルであるので、観察者の位置として、ほぼ中間のレベルに立場を置くことができた点。
- ③ 私が経験していない他の武道を、稽古に参加せずに調査するよりは、一ヶ月間合気道の道場に通ったほうが、さまざまな側面を見ることが出来ると考えたため。
- ④ 合気道は競技形式を一切とらないため、競技志向への批判が集まる現代武道とは一線を画しているが、そのため哲学、思想、精神主義など、抽象的な側面に重きが置かれる傾向がある。この漠然とした抽象的側面に対して、オーストラリアの人々がどのようなアプローチをしているのかは、競技形式を含んだ他の武道よりも、より文化的な様相を含むことが考えられたため。

以上である。

調査法としては、基本的に毎日稽古に参加し、道場の観察、人々の観察を行った。毎日の稽古を受け持つ先生たちが合気道についてどのような説明をしているかは、実際に稽古中彼らの説明を聞くことにより、知ることができた。さらに、多くの人々と稽古をともにしながら友好を深め、稽古中や稽古後の何気ない対話の中から、彼らが合気道に対してどのような観点をもっているかを調査した。

¹ 「財団法人合気会」は、合気道開祖植芝盛平直系の組織であり、流派でもある。合気道には、この他に藤平光一の「心身統一合気道」塩田剛三の「養神館合気道」（両氏とも合気会出身）など多数あるが、合気会は日本内外でもっとも普及が進んでおり、一般的に「合気道」は合気会のものを指す。本論でも「合気道」は合気会主導のものを意味する。

フィールドとしてシドニーを選択した理由は、以下のとおり。

- ① オーストラリアにとって、日本は最大の貿易相手国であるため、日本文化や言語に興味をもつ者が多いこと。
- ② 移民国であるオーストラリアでは、政府主導による「多文化主義」(Multi-Culturalism) が推進されているが、その中でもシドニーがいわゆる「人種のルツボ」として最大の都市であること。
- ③ しかしながら、白豪主義などの歴史的残像も残っており、西洋文化社会の側面を色濃く残していること。

以上である。

2. ライカート道場：日本文化を表象するモノと日本語

ライカート道場 (The Aikido Center NSW²)

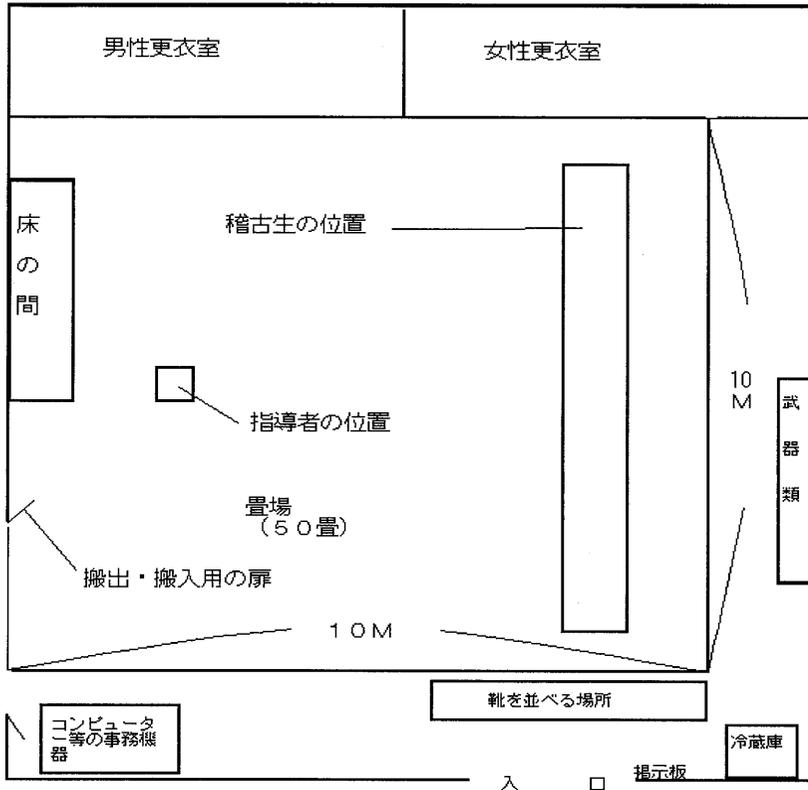
インターネットによって、シドニーの合気道の道場を検索したとき、そこで中心地的な役割を果たしていると思われたのが、この道場であった。本論においては、「ライカートにある道場」ということで以下「ライカート道場」と表すが、正式には、「The Aikido Center NSW」という呼称である。他に6つの合気会道場が存在するため、それを統合する組織名は、「The Aikido NSW」という。

シドニーの中心街から西へ6キロほど離れたところに、「ライカート」というイタリア人街があり、その中心的通りである「ノートンストリート」にライカート道場はある。私が初めてこの道場を訪れたとき、まず印象に残ったのが、その道場が教会の建物の一部であるというそのコントラストである。建物自体も、当然ながら日本で見られるような道場然としたものではなく、煉瓦造りの建物である。壁にはさまざまな落書きがされているので、外見からは武道場とは思えない。

足を踏み入れて、まず目に付いたのが、きれいに並べられた靴である。靴を脱ぐ場所の付近には、日本語で「世界人類が平和でありますように」と書かれた、日本でもよく見ることのできる、あの細い看板が立てられている。道場の下座側に当たる壁には、ひらがなで「あいき」と書かれた掛け軸、並べられた武器類、オーストラリアに合気道を伝えた菅野誠一師範の写真が飾られている。壁にかけられた時計は、中心に「合気道」と書かれており、時計の針の先端に道着と袴姿の人間の絵が描かれている。数字は漢数字である。道場の上座側に置いてある床の間には、木剣と杖が飾られており、その上の壁に、合気道の開祖である植芝盛平の写真と、植芝の書で「観自在」と

² 「NSW」とは「ニュー・サウス・ウェールズ州」(New South Wales) のこと。

書かれた掛け軸が飾られている。道場でのエチケットとして、稽古生たちは、道場へ出入りする際、この床の間に向かって一礼する。



ライカート道場 見取り図

稽古の始まりと終わりの礼は、日本のそれと変わらず、稽古生が下座に並んで正座し、指導者が上座に座って稽古生と向かい合い、礼をする形になる。まず、正面の床の間に一礼をし、指導者と向かい合って礼をする。その際の挨拶の言葉は、「お願いします。」「どうもありがとうございました。」といったように、そのまま日本語で行なわれる。この挨拶の日本語をスムーズに覚えさせるために、道場の掲示板には、日本語の発音通りにローマ字で書かれたものが貼り付けてある。「ONEGAI SHIMASU」、「DOMO ARIGATO GOZAIMASHITA」といった具合である。道場には、日本語を話せる者が日本人を除いては一人もいないため、私は奇妙な優越感を感じるようになった。

2. 日本的思想の理想化と神秘主義の強調

「The Aikido NSW」の代表者・月曜日のジョン

ライカート道場には5人の指導者がおり、それぞれの曜日に稽古を受け持っている。1人は中国系、あとの4人は西洋人で、それぞれが個性のある稽古を行っている。オーストラリアに合気道を伝えた菅野誠一師範は、すでにこの地にはおらず、現在はニューヨーク合気会の指導をしている。シドニーに師範が訪れるのは年に2回ほどなので、直接的な合気道の指導および道場の運営は、地元の高段者が行っている。彼らは合気道の指導を専門職にしているのではなく、それぞれが別の職業をもっている。

その中でも、月曜日の稽古を担当し、「Aikido Center NSW」の代表者でもあるジョンの稽古は、私のような日本人の合気道経験者から見ると非常に特徴的であった。合気道の稽古では、けがを避けるためと、体を温めるためにはじめに体操を行う。体操が終わった後、ジョンと稽古生は、顔の前で妙な印を結びだした。時代劇や漫画などでいわゆる忍者がよくやるようなものである。両手を組み合わせ、印を結び、ジョンは一見うつろな目と恍惚の表情を浮かべながら、顔の前から頭上へ印を動かし、再び顔の前に持ってくる動作を繰り返す。私は当惑しながらも、同じ動作を行った。

しばらくこの動作を繰り返した後、ジョンと稽古生は、印を胸の前から頭上へ突き上げながら、それと同時に「えい！」と気合をかけた。初めてそれを見た私は、ただ茫然としているだけだったが、二度三度と月曜日の稽古に足を運ぶうち、気合をかけるタイミングを計ることができるようになった。ジョンは一度だけこの動作について説明してくれたことがあったが、それによると、稽古への集中力を高めるために行っているという。自分の意識を大自然と一体化させて外へ移動させ、再び体のなかへ持っていく動作であり、それによって体の中の「気」が充満すると、自然に気合となって外へ出て行くという理屈を付けている。印を結んで上下に移動させるこの動作は、ジョンの稽古のときは必ず行なわれる。後期の調査中には、気合をかける前に「気合に備えろ (ready for KIAI)」などといったりしていた。

技の説明の仕方もまた特徴的である。合気道の稽古では、まず指導者が稽古生の前で模範の技を見せ、それから全員でその技を稽古する。合気道には競技が無いので、稽古をするときは、技をかける者と、かけられる者に分かれる。技をかける者を「仕手」と呼び、かけられる者は「受け」と呼ばれるのだが、この攻守を交代しながら、お互いに技を掛け合うことになる。そして、指導者が次の技に移ることを示唆するまで、同じ技を延々とかけつかけられつする。

実は、この「受け」に関して気になっていたことが一つあった。合気道では、相手を後ろ側に投げる技が多く、受身をきちんととらなければ後頭部を打つこともあり危険である。受身は身を守るために重要であり、その方法もいくらかあるのだが、後ろ側に投げる技を行う場合、皆必ずとっていいほど、後方に回転する受身をとるのだ。

回転するのに無理な体勢のときでも、強引にその形をとる。私には、そのことがこっけいに思えることすらあった。私が稽古中に受身をとる場合、当然このようにはしない。そのときの状況や投げられ方によって、もっとも適当な受身を選択していたつもりである。しかし、この受身に対する姿勢について、私はジョンからお叱りを受けることになった。

指導者が稽古生の前で技ごとに行う模範演武でも、当然「受け」をとる者が必要になる。この役は、指導者が、逐次稽古生の中から任意に選ぶのだが、私も何度かジョンの「受け」をとることになった。このときも、無理に後方に回る受身はとらなかったのだが、それを見てジョンは、稽古生に向かって、次のような趣旨の説明をした。

「後方に回転して受身を取れないような状況のときは仕方がないが、常に回転して受身をとるように心がけてほしい。回転することによって、そこに相手との調和や融合が生まれるのだ。合気道は何かを創り出すものだから、受身をとるときでもドタンバタンとやっていたのでは、何も生まれない。ドタンバタンとやってしまっただけは、そこで相手との関係が途切れてしまうからだ。」

「合気道は何かを創り出すもの」(Aikido creates something)という言葉は、どうやらジョンの口癖らしく、説明の最中に何度もそのフレーズを聞く事ができた。それ以来私は後ろに投げられるときは、できる限り回転して受身をとるように努めた。ジョンの稽古では、説明が頻繁に行なわれる。その内容は、技のかけ方といった技術面よりも、合気道の考え方といった思想面に重点が置かれているようである。たとえば、準備体操している間に、次のような説明をしたことがあった。

「自分の体は、ひとつの宇宙であり、地球である。右手が海であれば、左手は大地である。自分の体の中に、空や、木々や、山といった、大自然や宇宙を感じる事が大事であり、これは日本の文化では伝統的な哲学なのだ。」

ジョンが説明する内容や、話しているときの様子は、合気道の説明というよりも、「説教」をしているような印象を受ける。その姿はまるで、神父か牧師のようである。私はひそかに「プリーチャー」というあだ名を付けた。「プリーチャー」が「説教」をするとき、頻繁に使われる単語が、いくつかある。それをキーワードとして挙げてみよう。

Connection 〈つながり〉 Control 〈制御〉 Concentration 〈集中〉

Center 〈中心・肚³〉 Creation 〈創造・技の創り⁴〉

³ 「肚」とは、へその下3センチほどのところにある「臍下丹田」のことである。「臍下丹田」は剣道や弓道などでも強調される。合気道ではこれを「中心とか肚」などといって、稽古中でも生活のなかでも常に集中するべきところだとしている。シドニーの合気道でも「HARA」とそのまま発音したり、「Center」と表現したりする。

⁴ 体さばきから技につながることを、シドニーの合気道では「技を創る」と表現するようだ。たとえば「四方投げ」という技を「創る」場合、「Create Shihonage」と表現する。日本語では「四方投げにもっていく」

Extension 〈伸張・拡張〉 Ki 〈気〉

これらの前に動詞「Feel」が置かれる事が非常に多い。Cから始まる単語がやたらと多いが、偶然だろう。これらのキーワードのすべては抽象的な文脈で使われている。抽象的であるということは、理解しづらいということである。この理解の困難さによって、合気道はより、神秘的で深遠なものとして認識されることになる。

火曜と木曜のアレック

火曜と木曜の稽古を受け持つアレックは、「気」という言葉を必要以上に使って技の説明をする。教えを受けている稽古生たちは、「気」が何たるものかという質問はしないし、疑問に思っているようでもなかった。日本人である私も聞かれたことはなかった。たとえ質問されても、私ではおそらく具体的に答えることはできなかっただろう。ここで使われる「気」という概念は、「具体的には答えられない神秘的な力」のことを意味しているようだ。日本の合気道においてもこの概念は時々使われることがあるが、教える師範⁵の合気道に対する捉え方の違いによって、個人差があらわれる。そして、ライカートの道場で指導する先生たちは、皆多かれ少なかれ合気道の説明に「気」という言葉を使う。アレックは、その中でももっとも頻繁にこの言葉を使う。

アレックについて特筆すべき点は、私に対する態度である。稽古の最中、私に対して、どこか特別な態度をとる。一言でいえば、私の目の色をうかがっているようなのである。それだけではなく、なにか対抗意識のようなものすら感じられるのだ。技の説明をする時に、いちいち私の顔をうかがいながら話をするし、私に技の手ほどきをするときも、他の稽古生に対してするのとは違って、妙にぎこちない。

ライカート道場にいる日本人の会員は、2人しかいない。一人はワーキングホリデーでシドニーに来ている盛口氏、もう一人はアレックの細君である由美子氏である。盛口氏は白帯の無段者であり、由美子さんは有段者だが、日本で合気道をしてきたわけではない。したがって、日本でのみ合気道を修行してきた有段者の日本人は、その時点では私しかいない。しかも、正式な会員ではなく、一時的なゲストのような立場である。「日本で合気道を長年修行してきた日本人」という存在は、それだけで周りから一目置かれることになるようだ。指導者が合気道について語るとき、そこに日本語の語彙を含ませることもあるし、「日本の思想」とされるものを語るときもある。技の名称はすべて日本語である。その語りが正しいか正しくないかは、日本人のほうがよ

などという。もちろんこれは英語と日本語の表現の違いによるものだが、この場合もっとくだけて「Make~」と表現したほうが武道の技の表現には近くなるように思う。また、ジョンの口癖である「Aikido creates something」の場合は、明らかに技そのものとは別のことを指している。

⁵ 「師範」とは合気会に認められた高段者のことで、一般に各道場では彼らが教える合気道を学ぶ。ライ

く知っていると思われているし、日本が合気道の「本家」である以上、その合気道は世界でもっともレベルが高いと考えられているようである。

私は確かに長年合気道を経験してきたが、それでも初段止まりである。しかし、稽古中に私と稽古することになった何人かは、妙に緊張している様子の者もいたし、稽古後に何人かと喫茶店などに行くと、合気道についてさまざまなことを質問されることが頻繁にあった。したがって、アレック先生としては、私の存在自体が一種のプレッシャーとなっていたことも容易に想像できる。アレックが私に対して抱く感情と、そこから生まれる態度の要因は、それだけではない。私がこの道場を訪れたのが、学術的論文を制作するためであり、道場の様子自体を観察していることに対する反感の意識もそこにはあると思われる。

アレックは科学者ということもあつてか、私によって「調査される側」に立たされることに対して少々の憤りを感じていたのかもしれない。道場における私の調査の意図が何なのかということに対して、特に後期調査においてはアンケート用紙まで配ったためか、執拗に聞いてくるようになった。

私の限られた英会話能力では、次のように答えるのが精一杯だったといつてよい。

「僕は日本文化の一つとして武道をとらえ、その武道がトランスナショナルリズムの過程で国境を越える様相を調査しようと思っています。日本では武道を特別なものとして主張する言説がたくさんある。海外の人は武道の特別な部分を求めているという主張もあります。では、実際海外の人々はどのような形で武道を受容しているのか。この道場において僕が調べているのはそういうことで、簡単にいえば、日本とオーストラリアの通文化的な研究です。」

この答えは、私が調査しようと思っていることを正確に表しているわけではないのだが、アレックは次のように反論した。

「だが、合気道は道場によってスタイルがそれぞれ違うだろう。各道場のスタイルは、教える師範によって変わるものだ。だから、それで通文化的な比較ができるとはいえないのではないのかね。」

アレックの反論はもっともだといえる。なぜなら、日本国内だけを見ても、合気道に対する考え方や教授法は、それを教える師範や道場ごとに差異が生じているからなのである。したがって、たとえ同じ「合気会」の合気道ではあっても一概に同じ事をやっているとはいえないのである。こうなると、もはや「日本の合気道と外国の合気道の違いはこういうものである」などは、簡単にはいえなくなってしまふ。

しかし、ライカート道場における私の目的は、日本との違いを見ることではない。

カートでは菅野師範がそれに当たり、ジョン達指導者は、菅野師範の高弟ということになる。

ライカート道場で行なわれている合気道の特徴の背景にある、ある種の文化的事象の抜き出し、そして、人々が合気道に対してどのような意識で関わっているのかを調べるのが目的である。本多勝一が指摘した「調査される側の論理」(本多 1971 : 188-208) は人類学を行う者にとって、これからますます重要になっていく議論であろう。私の場合、アレックの「論理」がそれに当たる。しかし、アレックの私に対する反論の裏側には、それとは別の、もっとポリティカルな感情が潜んでいたのではないかと考えられるのだが、それは後述する。

3. 合気道と「正のオリエンタリズム」

「オリエンタリズム」と所与の分析概念

1978 年に出版された、エドワード・サイードの『オリエンタリズム』は、それまで西洋社会が東洋に対する威圧と支配の道具として創り出してきた「オリエンタリズム」および、その表象を創り出す「オリエンタリスト」を痛烈に告発するものであった。『オリエンタリズム』以降、「オリエント」および「オリエンタリズム」という概念は、「幻想的で魅惑の東洋」というエキゾチックな認識の意味から、サイードによって新たな意味を付け加えられる。それは、西洋の人々が東洋の人々を「他者」として位置付けるためのモデルであり、西洋に対して東洋は「劣っている」ということを表象付けるものであり、結果、東洋を支配し、威圧するための道具となっているということである。サイードの告発から現在にいたるまで、西洋の人々が東洋の文化について語ろうとするとき、『オリエンタリズム』のモデルを大なり小なり意識せざるを得ない状況になっている。

しかし、サイードから 20 年以上を経た現在、「オリエンタリズム」の概念はより「一般化」され、「こなれた」ものとなった。サイード本来の意味での「オリエンタリズム」に、より広範な意味付けがなされるようになり、概念自体が漠然としてつかめないものとなり、理解できない事象に無理やりはめ込まれるようになっている。

「一般化」がもたらしたのはそれだけではない。東洋の人々は、西洋文化の支配に対抗するために、「オリエンタリズムの告発」を武器として利用するようになった。また、自文化のアイデンティティを確立するため、そして文化のバトルフィールドで打ち勝つために、西洋の人々が漠然と抱いているオリエンタリズムを逆手にとって、自文化のオリエンタリズム的要素を積極的にアピールするようにもなった。すなわち、「オリエンタリズム」を「オリエント」自らが創り出すという現象が起こっている。「カウンターオリエンタリズム」と呼ばれるこれらの現象の出現によって、今や我々は「オクシデンタリズム」についても考えることが必要になってきたのではないだろう

うか。

青木保によれば、オクシデンタリズムには「正」と「負」の二種があり、その二律背反性の中で文化を表象付けているところに特徴があるという。

私の見るところ「オクシデンタリズム」には大別して二つの意味があると思う。一つは、西欧（アメリカ）の近代を理想的にステレオタイプ化したイメージで持つて語ること。自由・平等・博愛といったスローガンから市民社会と個人の尊重、人権・民主主義、そしてその科学合理主義と生活上の利便の追求と実践、音楽・文学・美術・建築などのハイ・カルチャー、都市の賑わいと娯楽などの総合的イメージである。高踏的でジェントルマンシップあふれたマナーと価値観、スポーツなどもそれに加わる。

以上のようなオクシデントの「理想化」論を「正」とするなら、それに対して、今ひとつ別の「負」の「オクシデンタリズム」とでも呼ばれるべき見方がある。これは逆にすべて負のイメージをもって西欧世界をとらえようとする見方である。（青木 1998 : 212-213）

「負のオクシデンタリズム」とは、「お手本」としての西洋のイメージではなく、逆に「そうになったらおしまい」といった逆ユートピアがあらわれていると青木はいう。日本でも、アメリカ的個人主義が社会を荒廃させ、家族や集団を分裂させたといったような批判がたびたびおこるのは、そうした「負のオクシデンタリズム」から生まれているものであろう。

「オリエンタリズム」と「オクシデンタリズム」の違いについて、青木はオクシデンタリズムにはお手本とすべき良いことの「モデル」としての西洋と、逆ユートピアに転落した西洋という二つの面が、互いに反映しあって発現していることを指摘する。しかし同時に、「正のオリエンタリズム」の存在についても示唆しており、オリエンタリズムにもそういった二律背反的要素があらわれ始めているという。オリエンタリズムとオクシデンタリズムの交差するはざまによって東西に引き裂かれるのではなく、非常に曖昧な形で両者が「混合」していくのではないかと青木は指摘する。（青木 1998 : 214-220）

合気道に見られる「正のオリエンタリズム」

道場主催の宴会の席で、少々酒が入った状態で私に話しかけてきた、同じく「ジョン」という、合気道をはじめてまだ2ヶ月の男は、いくら私が否定しても「日本は特別な国だ」という持論を崩そうとはしなかった。

「日本はあんなに小さな国なのに、西洋列強と互角に渡り歩いた過去があるし、アメリカのような大国と戦争をして一時は互角の戦いをした。敗戦後たった50年足らずで世界第二の経済力を誇るようになった。日本が特別でないのなら、これをどう説明するのか。僕は日本の特別な力を自分のものにするために合気道をやりたと思ったんだ。」

合気道は、相手の力を利用して技を仕掛けることに醍醐味があるといわれる。小さな者が大きな者を倒すことは、合気道の美学でもある。日本という小さな国が、過去から現在においても、大国と互角に渡り合っているということと、合気道の美学は、彼らにとってシンクロして写るのであろう。ここで一つ浮かんでくる疑問がある。オーストラリアに合気道を伝えた菅野師範は、オリエンタリズムの要素とどのように関わっているのか、という点である。

ジョンやアレックに代表される、合気道の「オリエンタリスト」たちは、みな20年以上のキャリアを持っている。ジョンの稽古で行う「印の結び」も、もとは菅野師範が教えたものである。アレックは、菅野師範に「気とは何か」と質問されたことがあると私に証言している。これを知るために、菅野師範自身の合気道観を調べる必要があるのだが、直接会って聞くことはできなかつたので、少々長い書き抜きにはなるが、雑誌のインタビューを見ることにする。

日本的な武術や芸術の型の稽古というのは、何かを伝承するという方法です。しかし、現在の稽古法はそうではなく、「技術」の反復なのです。ということは、稽古法としては、普通のスポーツと同じです。もちろん観念は違いますが。

合気道が爆発的に伸びたという理由を認識していない人が多いと思うけれども、以外にも合気道は、ふつうのスポーツと同じ方法をとっているということなのです。どんなスポーツでも、「技」の繰り返しということが練習の基本です。合気道もスポーツもこの点では同じです。そして、こうした練習では、往々にして、教えるコーチによって、少しずつ方法が違います。合気道でも同じなのです。つまり、「技術」については、各先生の感覚が違う。そこで同じ技でも違った方法で教える。そういう意味で、合気道が伸びたのだと思います。

「型」は、いわゆる日本の伝統方法ですが、それを大先生⁶が壊し、現在の稽古法になさったのです。それでも日本的な表現で教えることには変わりがなかったから、このことをよく認識していない人が多いのでしょう。昔の表現として、気だとか、呼吸力だとか、さまざまなものがあり、それを外国の方は神秘的に感じるのかも

⁶ 大先生（おおせんせい）合気道開祖植芝盛平のこと。海外でも“O-Sensei”とそのまま呼ぶことがある。

れません。

しかし、平たく言えば、稽古とは、体の使い方をうまくしたり、間合いを学んだりすることです。そういう能力を高めたいと思ったら、稽古、つまり技術の反復をきちんと実施することが、成果をもたらすのです。(合気ニュース 1997 : 7-8)

このインタビューが収録されたのは1997年であり、菅野師範が海外へ合気道を普及させるために日本を旅立ったのは1965年(昭和40年)のことである。その遠征の中ではじめて訪れた場所がオーストラリアであった。オーストラリアの合気道の歴史はこのときから始まったのである。つまり、菅野師範がオーストラリアに合気道を伝えた当時から、このインタビューまで実に30年以上の開きがある。したがって、当時の菅野師範の合気道観と、現在のそれとの間にかなりの違いがあることは、十分考えられることである。しかし、今でも菅野師範は年に2度シドニーを訪れ指導しているのである。

菅野師範のインタビューで注目すべきことは、合気道に日本的伝統を認めていないことである。合気道は、植芝が古流武術の日本的伝統を破壊することによって生まれた、と菅野師範は答えている。合気道の稽古の内容は、反復するという意味でスポーツと同じであるとするその主張は、武道をスポーツから区別しようとする一般の武道論とは異なるものといえる。

「技の反復」というスポーツと同じ要素の中で、「気」や「呼吸力」という日本の伝統的概念を使用したために、海外の人々には神秘的に感じられたのではないかと菅野師範は回顧しているのだが、その神秘性の正体は単なる身体技法に過ぎないことを吐露している。神秘的な力は、明確に否定されているのである。したがって、シドニーの合気道における神秘主義の強調と、菅野師範の合気道観には、現在、相当の開きがあると考えてよいだろう。そして、海外の人々が合気道に神秘性を見出したということを、菅野師範が認めているということは、当然合気道普及のためにそれを利用したということも考えられるのである。なぜなら、日本の伝統的概念を使って教える必要がないと考えるのであれば、現地の概念を使うようにすればよいのであり、あえて日本の概念を使う必要はないからである。菅野師範は、合気道普及のために、カウンターオリエンタリズムを織り成す結果となったのだ。そして、当然、そういった合気道の普及自体もカウンターオリエンタリズムとなる。その意味では、菅野師範も「オリエンタリスト」の一人に含まれてしまうだろう。

ここまで見れば、一目瞭然である。合気道の特別な力、神秘的要素、哲学は、オリエンタリズム的要素を加えることによって「他者」の持つ力を魅力と感じさせるための補強となりえる。そして、オリエンタリズムを表象する最たるもののひとつとして

の合気道がそこにはある。だが、そのオリエンタリズムは「正のオリエンタリズム⁷」になっているとはいえないだろうか。

オクシデンタリズムの視点からすれば、自由・平等・博愛、個人の尊重、人権・民主主義、科学合理主義と、生活上の利便の追求と実践、といった「正のオクシデンタリズム」は、視点を変えれば「負のオクシデンタリズム」にもなり得る。「お手本」と「逆ユートピア」の二律背反性が、前述した青木のいう、オクシデンタリズムの特徴である。さらに、この「負のオクシデンタリズム」はカウンターオリエンタリズムによって強化され、オクシデント自身も「負のオクシデンタリズム」を意識するようになることは、十分考えられることである。換言すれば、カウンターオリエンタリズム自体が、「負のオクシデンタリズム」の文脈に含まれているといつてよい。それは、オーストラリアのような多文化多民族国家においては、一層大きな影響力をもつ。

カウンターオリエンタリズムは、一般的に「負」とされている「オリエンタリズム」を「正のオリエンタリズム」にするための、文化のポリティクス上での戦略である。おそらく、「負のオクシデンタリズム」に対する反応は、「正のオリエンタリズム」という形を伴ってあらわれてくるのではないだろうか。我々日本人を含め、東洋が「正のオクシデンタリズム」を抱くとき、その中身である「自由・個人の尊重・人権・民主主義・合理的思考」などの諸要素に関して、西洋を本家、もしくは「中心」とみなし、「もっとも進んでいる」とみなす傾向があるのは、いちいち文献その他を挙げずとも周知の事実である。

たとえば、「日本はまだ遅れている」という言説は、「正のオクシデンタリズム」をものさしにして語られている。つまり、世界の公準は「正のオクシデンタリズム」の諸要素において、どれほど進んでいるかということである。カウンターオリエンタリズムは、世界の公準である「正のオクシデンタリズム」という舞台の中であられる。日本型経営がもてはやされたり、西洋の「個人主義」に対抗する形で「集団主義」のモデルが日本人論の主要な議論になったりした背景の一つは、そこにあるとも考えられる。これと似たようなことが、武道の世界では起こっているといえるだろう。西洋が武道に「正のオリエンタリズム」を抱くとき、その本家、すなわち「中心」は東洋であり日本である。武道の世界において「もっとも進んでいる」のは日本であり、「自分たちの道場はまだ遅れている」とするときは、「正のオリエンタリズム」をものさしにしていつている。私が日本人だというだけで特別な態度で臨まれたり、菅野師範に最高の権威が与えられたりしているのは、そうした構造と感情の上に成り立っている。

⁷ ここから後の議論では、オリエンタリズム・オクシデンタリズムの両者に「正・負」のいずれかを付けて、区別して考える。どちらもついていない場合は、「正・負」の両者を含んでいる。

視点を移してみれば、「正のオクシデンタリズム」に対抗して東洋がカウンターオリエンタリズムを利用するように、「正のオリエンタリズム」に対抗して西洋がカウンターオクシデンタリズムを利用する場合も当然考えられるはずである。換言すれば、「負のオクシデンタリズム」を利用して、西洋における武道を、日本伝来の武道的思想によって支配しようとする日本の武道のあり方に対し、対抗する仕方である。たとえば、現在の柔道はほぼ「正のオクシデンタリズム」のひとつ「スポーツ」に該当している。カラー柔道着の問題のように、柔道界における日本とヨーロッパとの間に起こる文化的コンフリクトもいくつか見ることができる。

西洋人が織り成す「逆カウンターオリエンタリズム」

合気道におけるオリエンタリズムを「正のオリエンタリズム」と位置付けてみたものの、オリエンタリズムは所詮、表象でしかなく、「まやかし」である。前述した通り、ライカート道場のみならず、シドニーで合気道を稽古する人々の中には、ジョンの合気道の教授法に対して疑問を抱く者も多く、それは特に日本で合気道を経験した人々に多い。

午前3時まで、私にシドニーにおける合気道の不満をぶちまけたマークという男は、2年間日本に滞在していたことがあり、新宿の「合気会本部道場」で稽古していた経歴を持つ。身長190センチの偉丈夫で、肩幅も広く、ラガーかレスラーかといった体躯をしている。マークは、ジョンの合気道の教授法が、日本のものとはまったく異なっているという。私自身にもそれはよく分かっていて、しかし、ジョンにもまた、日本で合気道を稽古した経験がある。これについては、「たかが一週間で何が分かるものか」という一言で片付けられた。しかし、ジョンのように、20年以上も合気道に携わってきた者にとって、その違いを理解するには、おそらく一週間もあれば十分であろう。すると、ジョンは日本の合気道との違いを理解した上で、あえて自らの方針を変えなかったことになる。

マークや、そのほかジョンに反抗する者たちは、ジョンが合気道の精神性や神秘性を「説教」したり、それらを表象付けるパフォーマンスを行ったりする意味を、「自らの権威付けのため」と捉えている。つまり、マークのように日本で長期にわたって合気道を経験した者に対して、ジョンは恐怖を抱いているというのだ。

ジョンは「説教する」ことによって、合気道に関して漠然としたイメージ、すなわち「正のオリエンタリズム」を抱いているシドニーの合気道修行者の大多数に対して、「合気道の何たるかを知っている」ことを、アピールしようとしているのであろう。すなわち、自己がもつ「知識」を内外に示すことによって「権威と権力」を得るといふ、「知識と権力」の関係における、政治的戦略である。換言すれば、ジョンの行って

いることは、日本の合気道に対抗するための個人的な「逆カウンターオリエンタリズム」(Counter-counter Orientalism) とはいえないだろうか。その証拠に、ジョンは日本で長年合気道に携わってきた者に対して恐怖感を抱いている。私自身もそれを肌で感じたし、菅野師範以外の合気道を認めないという理由で、シドニーの合気道を見たいと要求した日本人の高段者を追い払った過去もあるという。

「逆カウンターオリエンタリズム」の「逆」には、二つの意味がある。ひとつは、西洋人がカウンターオリエンタリズムで日本に対抗するという意味での「逆」である。もう一つは、日本のカウンターオリエンタリズムとして普及された合気道に、新たな「正のオリエンタリズム」の要素を付け加え、それによって日本の合気道支配に対抗しようとする、「カウンターオリエンタリズムを逆手に取る」、という意味での「カウンター」を日本語にして、「逆」とする。

合気道の世界における日本の支配に対抗するため、ジョンは「カウンターオキシデンタリズム」の形をとらなかった。合気道が競技形式をとらず、精神性や哲学性に重点を置いていることが、考えられる一つの要因であろう。「オキシデンタリズム」では、西洋社会において合気道は魅力を失ってしまうことがある。そこで、ジョンはむしろ菅野師範のカウンターオリエンタリズムに、さらに自らの創造の産物である「正のオリエンタリズム」を加え、シドニーの合気道界における、自らの権力と政治のために利用しようとしている。

また、菅野師範を「神」として崇拜し、その言動を噛み砕いて「説教」ということは、換言すれば「正のオリエンタリズム」表象の象徴である菅野師範を、ジョンは自らの権力と政治のために利用しているともいえる。これは「道場内のポリティクス」とでも捉えられるものである。

私に対して特殊な態度をとっていたアレックも、その「道場内のポリティクス」で戦う者の一人である。「調査される側の論理」としてのアレックの論理も、「道場内のポリティクス」によるものとは考えられる。日本人である私が道場を調査するということは、合気道の世界においては西洋を支配している日本人が竹馬から見下ろしているかのごとく感じられたのかもしれない。そして、私をその竹馬から引きずり落とすために、アレックはあのような態度をとったといえるのではないか。私のような日本人の有段者は、彼らの「道場内のポリティクス」の中では、マークと同じように、恐怖感を与える存在として捉えられるのかもしれない。

「オリエンタリズム」と「オキシデンタリズム」のはざままで

ジョンの「逆カウンターオリエンタリズム」を私に思い起こさせたマークではあるが、彼もまた、日本を表象付ける「正のオリエンタリズム」に魅せられた者の一人で

ある。マークは、自分が真に日本のことを理解していると信じてうたがっていない。それは、2年間の日本での生活によって、自信付けられたものなのであろう。マークは日本の歴史についても博識であると自負している。一度、日本の若者について苦言をもらしたことがあった。日本の若者は、自文化を大事にしていないというのである。アメリカやヨーロッパの文化ばかりを追いかけ、自分の国の歴史さえ知らないことに腹立たしさを覚えるらしい。「俺のほうが日本のことをよく知っている」とマークは豪語したものだ。しかし、できすぎと思われるかもしれないが、マークはオーストラリアを植民地化するきっかけとなった、ジェームズ・クックのことを知らなかった。また、大のアメリカ嫌いでもある。

マークは「正のオクシデンタリズム」の代表として認識されているアメリカという国を、「負のオクシデンタリズム」としての「逆ユートピア」と捉えており、それゆえに、「正のオリエンタリズム」に惹きつけられているといえ、これもできすぎであろうか。実際、マークは日本文化を表象付ける「記号」に取り付かれているといつてよい。部屋の中は、その「モノ」一色である。床の間に木刀と杖を飾り、日本で買ってきた漢文の掛け軸を飾る。床の間に置いてある品物は、友人にも許可がない限り触らせないという。また、ベッドではなく布団を用い、(ただしそれは布団と呼べる代物ではない。シドニーでは「FUTON」という日本語で実際に売られているものである。)かけ布団には、まったく意味をなしていないひらがなと漢字が羅列されている。夏には、「一番」とか「禅」とか毛筆漢字で大きく書かれたシャツを着る。

マークには、日本人女性と離婚した悲しい過去がある。なぜ離婚したのかについて、彼は次のように説明した。

「彼女は、西洋人らしい西洋人を求めていたのさ。ところが俺は、日本人らしい日本の女の子を求めていたんだ。俺はこのとおり西洋人らしくないし、彼女は日本人らしくなかった。オーストラリアに二人で戻ったときには、彼女は別の西洋人らしい男に惹かれていった。こればかりはしょうがないと思ったよ。」

マークは彼女に「正のオリエンタリズム」を求めていた。そして彼女はマークに「正のオクシデンタリズム」を求めていた。幻想の中の異文化異性関係とでもいえようか。両者のはざまの中で、ついに二人は引き裂かれてしまったのである。そしてこのようなことは、そのまま日本武道に関する言説においても当てはめることができる。柔道のオリンピック入りから始まる武道の「スポーツ化」現象は、まさに「正のオクシデンタリズム」によるものであった。しかし同時に、武道を普遍的なスポーツではなく、日本固有の文化であるとするカウンターオリエンタリズム、すなわち「正のオリエンタリズム」も存在する。どちらも「幻想」なのかもしれないが、それに携わる人々にとっては大きな意味を持つ。

オリエンタリズムとオクシデンタリズムのはざままで武道は揺れ動いているといつてよい。その動きは、今や日本だけでなく、世界中に広まった武道に対して、西洋東洋を問わず影響を与えている。武道は、これによって東西に引き裂かれるのではなく、青木のいうように、むしろ両者の「幻想」を糧として、新たなる形を創り上げていってほしいと願うが、現実を見ると、この二極分化はますます進んでいるように思われる。

ただし、今回のフィールドであったシドニーおよびオーストラリアが、西洋人中心の社会でありながら、地理的にはアジア、オセアニアに属し、オクシデントとオリエンの二項対立の中で、非常に微妙な位置にあることも、忘れてはならないことである。その点、今回の論文では、オーストラリアの人々を、他の西洋社会の人々と同じように、「オクシデント」というひとつのカテゴリーに無理やり押し込め、先行研究に頼ってオリエンタリズムの議論を行ってしまったという点は、反省すべきである。

また、海外で武道がどのように受容されているかについて、今回はオーストラリアの、しかも合気道という限られた舞台において事例を紹介したが、地域や武道の種目が違えば、当然以上の議論では収まりきれない様相も見えるはずである。加えて、書道や華道、茶道など、武道も含めたいわゆる「道」と名のつく日本の「伝統的」文化活動に、とかくオリエンタリズム的要素が加わりやすくなることも考えられることである。これら他の「道」と武道の違いは、類似する文化としての「スポーツ」のような存在がないことで、自己の文化的アイデンティティーに揺らぎが起こらない点であるが、今回シドニーで見ることのできた「正のオリエンタリズム」に、これら他の「道」に対するものと同じ文脈が流れている可能性は極めて大きいと思われる。

今後の課題としては、以上の点を反省し、オリエンタリズムの議論に関しては武道のみならず、他の「日本的」な「伝統文化」、特に「道」と名のつくものにもスポットを当てて、その上で海外の武道および日本の武道の政治的力学関係を多角的に研究し、明らかにしていきたいと考えている。

4. まとめ

日本の武道人は、武道論を通して世界の武道のあり方が単なる「スポーツ」にならないよう「監視」している。武道の「伝統」と「本質」が失われることは、武道の文化的アイデンティティーに危機をもたらすだけでなく、日本人の民族的アイデンティティーにも危機をもたらすと考えているからである。では、武道は「スポーツ」とならず越境することが可能なのであろうか。

今回、シドニーでは合気道の道場を中心にフィールドワークを行った。合気道は競

技を一切行わないため、「スポーツ」にはなりづらい、とも考えられるだろう。ライカー道場では、確かに合気道は「スポーツ」ではなかった。しかし、武道論が主張するような「伝統」と「本質」にのっとったものかといえば、そうではなく、それらを表象する「正のオリエンタリズム」に起因するものが多大な影響を及ぼしていた。しかし、日本の武道人は、もしそのことを知っていたとしても、ある程度深遠な態度で武道に臨む外国人を、評価するだろう。

では、いったい「伝統」と「本質」に基づいた武道とはどういうものなのだろうか。実は、日本の武道人も、それが何なのか、明確には定義できないでいる。だからこそ、「武道とは何か」という武道論が生産されているともいえる。武道論は常に「伝統と本質」を主張する。しかし、それら「伝統」は、海外の武道のあり方と微妙な相互作用を起こし、それによってダイナミックに変化し、再構築されているといえる。武道の「伝統」は本質主義的な主張を背景に語られるが、実は同時代的なものである。「武道の独自性」を保護するために、武道論は世界に向けて「監視のまなざし」を「生産」し、それを「消費」する人々が「伝統」を再構築していくのである。したがって、武道論の「生産」に対し、それを「消費」する人々の受け止め方まで調べる必要があるが、それは今後の課題である。

引用・参考文献一覧

- 青木保 1998『逆光のオリエンタリズム』岩波書店
浅見定雄 1983『にせユダヤ人と日本人』朝日新聞社
植芝吉祥丸 1995『合気道一路』出版芸術社
尾形敬史ほか 1997『競技柔道の国際化』不昧堂出版
エドワード・W・サイード 1986『オリエンタリズム』今沢紀子訳 平凡社
佐々木武人ほか 1993『現代柔道論』大修館書店
K. ブランチャード・A. チェスカ 1988『スポーツ人類学入門』寒川恒夫訳 大修館書店
本多勝一 1971『殺される側の論理』朝日新聞社
B・モーラン 1993『日本文化の記号学』村山紀昭・黒川武訳 東信堂
山下晋司・船曳健夫編 1997『文化人類学キーワード』有斐閣
「季刊合気ニュース No. 112 春号」1997 合気ニュース